

座談会

ユースに聞く 性と生殖に関する自己決定と YWCA

国内そして世界各地で女性の人権問題が噴出する現在、Y W C A に期待されることは何か。新聞委員会は 2022 年 11 月号に、雀部真理さん(日本 Y W C A 人権・ジェンダー委員会委員長<執筆当時>)の寄稿「RISE UP! 性と生殖に関する健康と権利～若い女性のエンパワメント～」を掲載、さらに 11 月 29 日に座談会をオンラインにて開催した。出席者は雀部真理さん、東京 YWCA のユースで Rise Up! School Visits (RUSV) メンバーの矢田部沙羅さん、新聞委員の川戸れい子。司会は新聞委員の弓削悦子が務めた。

◆生殖に関する自己決定の権利

弓削 11 月号の記事の中に「SRHR (Sexual and Reproductive Health and Rights) はあらゆる女性のエンパワメントの 1 丁目 1 番地」という一文がありました。これを受けて今回の座談会では、RUSV の活動を通して SRHR の大切さを若い世代として発信されている矢田部さんに活動の中で感じていること、YWCA に今後何を期待するかということを中心にお話しさせていただきたいと思います。

さっそくですが、アメリカで「人工妊娠中絶は憲法で保証する権利と認めない」という判決が出ましたが、このことから話していただくのはどうでしょうか。

矢田部 そうですね。100 年近く時代が戻ってしまったようで衝撃を受けました。アメリカは日本より進んでいると思っていたのに失望しました。

川戸 6 月に連邦憲法裁判所が出したこの判決は、明らかに 11 月の中間選挙を睨んだものでした。連邦憲法裁判所の判事 9 人のうち 5 人までが共和党のトランプ前大統領が指名した判事であり、支持基盤を固めようという極めて政治的な思惑が働いていたと思われれます。共和党の支持基盤の一つにファンダメンタリストーキリスト教原理主義者と呼ばれる人たちがいます。元々カトリックは人工妊娠中絶に否定的ですが、現在ではあまり激しいことは言いません。一方ファンダメンタリストの中には進化論を否定するような人もいますが、その意向が政治に利用され、

アメリカ社会を動かしようということなのです。しかし結果として今回の選挙では SRHR を尊重する立場が支持を得ました。アメリカの Y W C A も生殖の権利に関して早くから「プロチョイス（女性の選択を重視）」の立場をとっています。

雀部 世界 Y W C A の長年の歴史の中では、あまり「女性の権利」がフォーカスされてこなかったなと感じています。1980 年代の日本 Y W C A 全国総会でフェミニズム的な発言があった時、「女性としてではなく人間として」という反論があったのを覚えています。また、2019 年の CSW (国連女性の地位委員会 United Nations Commission on the Status of Women) への参加メンバーが性教育に関する発表をすると聞いて、「えー！性教育？」と言った Y W C A 職員もいました。もっと高尚なテーマがあるでしょ、という感覚があったと思います。しかし、例えば女性の政治家を増やしたいと思っても、自分の人生を自分で決められる女性が増えないことには無理ですよね。そういう意味で、自分の身体のことをちゃんと知り、そのことを自分でコントロールし、自分で決められるということが、すごく大事なことです。

◆ Rise Up プログラムについて

矢田部 世界 Y W C A が発信している「Rise Up プログラム」とは、transformative leadership（社会を変えていく、変革への力となるリーダーシップ）のプログラムです。政治的な活動によって初めて社会的な変化をもたらされるわけですから、若い女性がいかに政治参画をしていくかということも書かれています。日本の若者は選挙に行かないと言われてますが、RUSV では、どこに投票したらいいかわからないという人に、例えばあなたが「女性の人権」を大事にしたいと思ったら、「この政治家は夫婦別姓についてどう考えているんだろう」など一つの「軸」を持って選挙に臨んでみたら？ というような提案などをしています。東京 YWCA の RUSV は「性的同意」や「性犯罪刑法」についての学習、特に日本では性交同意年齢が 13 歳になっていることと「暴行・脅迫要件」が外れていないことなどを知ってもらう取り組みに力を入れています。

◆ 日本における性教育の難しさ

弓削 夏の中高 Y W C A カンファレンスで包括的性教育のワークショップがありましたね。

矢田部 中高 Y W C A でワークショップをやろうとすると、いろんなハードルがあって、例えばタイトルに「性」という字を入れなくてほしい

と言われます。最初は「性的同意って何？」としていたタイトルを「同意って何？」に変えたケースもありました。また、危うく同意なしに性行為が行われてしまう場面を想定したロールプレイングの台本を用意したときも、教員との相談の中で、ちょっと激しいからとキスやハグに変わってしまいました。踏み込みたいところにまでなかなか踏み込めない現実があります。

日本における性教育は、進んでいる学校もあるし、進んでいない学校もある。結局それが教員の裁量によって決まってしまうことが問題だと思います。私たちは公教育での包括的性教育の必修化を主張しています。何年生までに何を教えるかなどの指針が必要です。

川戸 性的同意のことから言うと、女性はどうしても男性の顔色をうかがってしまう。嫌われたくない捨てられたくないという思いから NO を言えない。それは女性が社会的に弱い立場にあるからではないか。「女性の権利よりもまずは人間」と言っても、現実に女性は差別され不利な立場にいるわけです。YWCA は、そういう問題について社会変革を目指さなければいけないと思うようになりました。

雀部 学校教育の場でも褒められる努力より、叱られない・嫌われない努力をさせられるようになっていきますね。出る杭は打たれる。本当にくだらない校則を守らせる。公教育に委ねていたら、自分で考える力は確立できません。やはりその辺を、YWCA が違う視点で担っていく。性教育に限らず、おかしいものはおかしいと言っていい、現状に甘んじず変えていこう、変えられるんだと思える若い人たちを育てていかないことには、政治面でも変わっていけないと思います。

◆ SRHR を知ることで社会的な視点を

矢田部 私が YWCA に関わるようになったきっかけは東京 YWCA の水泳教室ですが、野尻キャンプに参加するようになって CSW に声をかけていただきました。そういう機会に恵まれたから、私はフェミニズム的な視点を持つことができました。ティーンエイジャーが大人になっていく中で、社会的な視点を獲得することは非常に大切だと思います。でも YWCA にはユースが少ないですね。今後もっと SRHR に重点を置くようになれば、自然とユースは増えるのではないかと感じます。

雀部 日本の YWCA がもっと SRHR に力を入れていくことを望みますが、現実的にどんな取り組みから始めたらいいのか…。何かアイデアがありますか？

矢田部 例えば、Rise Up に関わりたい、中高生相手に授業をするとき

のテクニックを学びたいという大学生はたくさんいます。でも、実際に活動するには知識が不十分と感じて自信を持てずに離れていく人が少なくないので、職員や他の会員によるサポート体制があるといいなと思います。そして SRHR に対する姿勢をホームページで打ち出していく。非核や護憲など、現在 YWCA が発信しているテーマは、若い世代にとっては自分事を感じにくいのです。でも痴漢とかデート DV だったらもう少し身近に感じられる。そういう若い人を取り込むための広報活動になると思います。

それから、Rise Up の活動に参加することが大学の単位として認められるような仕組みができれば、学生が YWCA に関わるきっかけになるのではないかと思うんですけどね。

川戸 単位に関しては、一種のインターンシップのような形で学生を受け入れたことがあります。昔は大学にも YWCA があったけれども 1970 年代の初めになくなりました。でも、これから大学との結びつきを作ることとも考えられるかもしれません。

基本的には YWCA ができることは、教育に関わることだと思います。公教育に任せておけない部分を YWCA のリソースを活用して、教育の面から社会変革を考えていくことができるのではないのでしょうか。

◆アドボカシー（政策提言）の重要性

矢田部 昔は、東京 Y W C A はシェルター的な働きをしていたそうですが、現代でも渋谷の駅前には今晚泊まるところが無くて男性に声をかけられるのを待っている少女があふれています。売春が福祉に勝っているというのが実態です。YWCA は若い女性に向けた福祉事業を強化できないのでしょうか。

教育はたしかに大切です。でも、今晚泊まるところがないからナンパされるのを待っている少女に、あなたが見ず知らずの男性に対して体を売るということは、あなただけの問題ではなくて、この社会の女性全般にとって、あなたが思っている以上に大きな不利益なんだ、あなたが今自分自身でこれを食い止めない限り、男性が若い女性から性的搾取をする現状というのは変わらないんだよ、というような、そういう大きな視野をその子にその時点で持ってもらうことって、絶対無理だと思うんです。今まさに渦中にある女性に対してそれを求めることは、本当に酷なことだと思うんですよね。

そういう教育も福祉も、本当は政府がやらなきゃいけないことじゃないですか。福祉からこぼれた人たちを、民間団体が何とか拾い上げよう

としていること自体が、政府が機能していない現状を示しています。ですから、意見書・要望書などによって政府に働きかけ続けることも、もう一方では必要だと思います。

◆シニア・ミドル・ユース

雀部 インタージェネレーションな（多世代間の）共働はYWCAの自慢できる特色ですが、現場は試行錯誤ですよ。矢田部さんは、シニアとの関係でつまずきを感じていることはないですか？

矢田部 YWCAの先輩方はよく心配してくださるのですが、職員も委員も、私たちの意見を尊重してサポートして下さいます。ただ、ユースたちもみんな二足目三足目の草鞋を履いて、アルバイトの時間も削ってYWCAの活動にも関わっているわけなので、自分たちがやりきれない範囲のこと—SNSの管理であったり、いろんなネットワークづくり、公的機関との連絡などを職員に頼みたいという希望はあります。

また、何かやりたいことある？ と漠然と聞かれるのではなく、こういうことをやろうと思うから、こういう船ができたから、あなた乗っからない？ という、そういう誘い方をしてもらえると参加しやすいです。企画の捻出がいちばん体力を使うところですので。

あとは、アルバイトの制度を作ってもいいのではないかと。1プロジェクトいくらでお金がもらえるようになったら集まる人も出てくるんじゃないかと思うんですけど。

川戸 アルバイトの制度は考える価値はあると思います。

雀部 矢田部さんはインタージェネレーションなところで苦勞していないと言ってくれましたが、YWCAに関わるユースが皆そうなのかはまだ気になるところなのです。各地域のYWCA共通の課題として、どうやって多世代が一緒に動いていくかということは大事なポイントだろうと思います。

◆おわりに

川戸 この座談会の企画の発端は、性と生殖に関する女性の自己決定に関して、YWCAはどう関わっていくのかという問いでした。世界YWCAもアメリカのYWCAも「プロチョイス」の立場です。では東京YWCAはどうか。私たちはキリスト教基盤に立つ団体だけれども、女性が自分の人生を「チョイス」できる道を作らなければならないと思う。チョイスの余地もなく夜の街に立つ人が大勢いる中で、私たちのなすべきことは何なのかということ具体的を考えていく必要があると思います。

あらゆる人の権利が少しでも守られるように、皆が少しでも良く生きられるように、日本の制度の不備に目を凝らし、そこに関わっていくことができればと思います。YWCAはそのためにあるわけですから。

弓削 本日は貴重なお話をありがとうございました。

(文責 新聞委員会)